

11年9月までの39年間、主として洋書目録の専門家として勤務し、多くの司書を育て、京都大学附属図書館の目録の名を全国に知らせる基礎を築いた事績は記憶される必要がある。笹岡は又、書誌学者としても当時の幾つかの雑誌に論文を発表し、自ら稀観書の蒐集に励み、時には図書館主催の展覧会に蔵書を出品したり、蒐集をめぐる新村館長と意見を戦わせたこともあった。新村は随筆の中で、笹岡を「竹世坊」と仇名して触れている。司書官にまでは昇り得なかったが、最後には高等

官の待遇に列して退職した。残念ながら、事務職員の職場における履歴の把握は、本人の在職中に限られており、笹岡についても退職後のことは一切わからない。住所も死亡時期も墓所も私は知る術を持っていない。笹岡の一の弟子であった文学部図書室主任の谷口寛一郎司書が生前私に、「笹岡さんの死後、その蔵書が河原町今出川上ルの古本屋竹山善書堂へ売りに出されたそうだよ、案に相違してよい本はなかったということだった」と話されたことがあるのみである。

## 京都大学図書目録作成の電算化にあたって

はじめに

本学が学術情報センター（National Center for Science Information System 以下、NCと略す）に図書の日録情報の登録を始めて足かけ4年が経過した。平成2年1月末現在、本学のNC登録データ数は、書誌約7万件、所蔵約11万件である。

ところで、昨年から今年にかけて、附属図書館の電算機のリプレイスが行われ、それにともない、ほぼ全ての部局に目録用端末が配置された。これにより、本学における目録作成の電算化がさらに前進することになる。目録作成の電算化が新しい段階を迎えようとしている今、改めて本学の目録体系について概観し、目録検索、目録作成の一助としたい。

### I. 総合目録の現状

現在の目録作成の概要を図1に示した。

本学の目録作成は、現在、カードによる作成（手書きあるいはタイプ）と電算機を使ったオンライン目録作成の2方法により行われている。図からもわかるように、

- ① 受入れ図書のすべてをオンライン目録作成している部局
- ② 受入れ図書の一部をオンライン目録作成し、

それ以外は目録カードを作成している部局

- ③ 受入れ図書のすべてについて目録カードを作成している部局

と、部局により様々な状況にある。オンライン目録作成によりデータベース化された図書については、目録カードを全学総合目録（カード目録）に排列していないが、各部局で作成された目録カードは附属図書館に送付され、附属図書館が編集・加工し全学総合目録（カード目録）に排列している。従って、総合目録は、カード目録とオンライン目録（近畿北部地区国立大学目録データベース）により構成されていることになる。

### II. オンライン目録

#### 1. オンライン目録システムの概要

学内の図書館・室の目録用端末から附属図書館の電算機を経由してNCの目録システム（NACSIS-CAT<sup>\*1</sup>）に接続して、目録情報の登録（以下入力と称す）をする。NCに入力されたデータは、一時的に附属図書館のデータファイルに取り込まれ、その日の夜、近畿北部地区国立大学目録データベース（以下、近畿北部地区目録データベースと略す）に登録され、翌日、検索可能となる。又、必要があれば、カード、図書の背ラベル、

## 目録作成の概要

平成2年1月現在

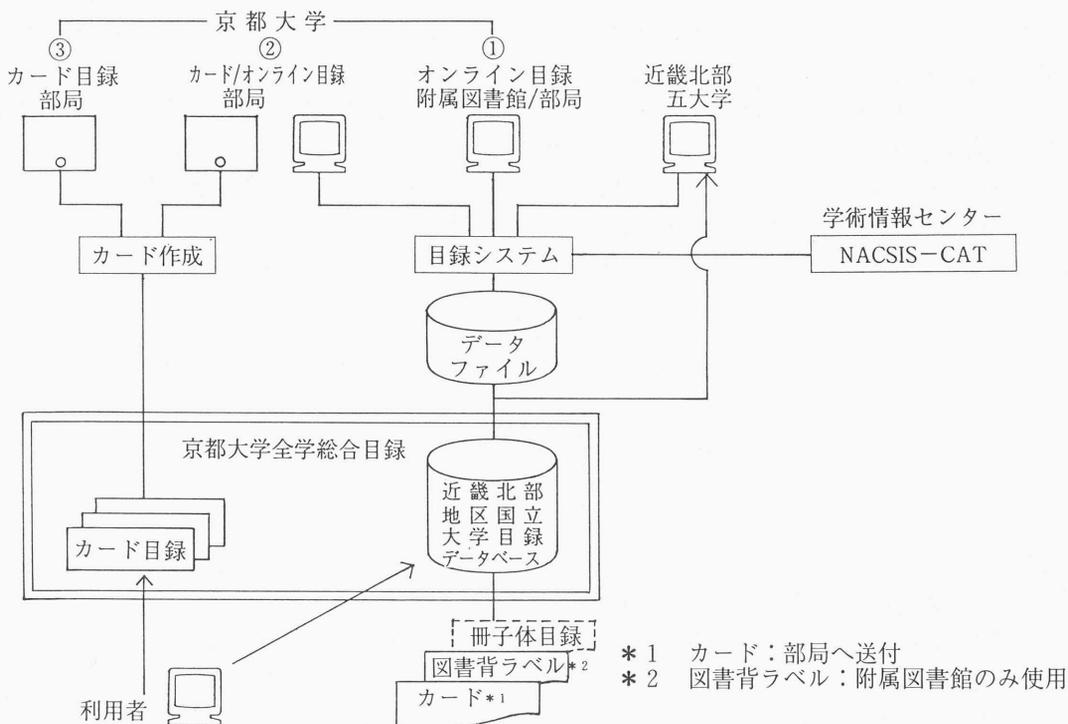


図1

冊子体目録の出力が可能である。冊子体目録については、現在、より使い易い目録を目指してプログラムを開発中である。なお、目録システムの詳細については、「静脩」Vol. 24, No. 3 (1988. 1) を参照されたい。

### 2. オンライン目録作成

オンライン目録がカード目録と大きく異なる点は、「オンライン分担目録方式によって総合目録データベースを形成するためのものであり」<sup>\*2</sup>といわれるように、全国の接続図書館がNCで保有する書誌情報を共有し、「分担」して目録作成を行うところにある。

附属図書館が接続した当初はわずか4大学であった接続館も平成2年1月現在は112大学となり、NCのデータ量もそれにともない増大している。

目録の分担作成の意図は十分実現され、入力には既に入力されている書誌をチェックし、修正した後、所蔵情報を追加するのが大半である。しかし、「分担」して目録作成するのであるから、入力に際しては当然種々の「約束」に従い、また、常にNCの仕様変更などに留意する必要がある。

入力に際して特に留意していることは、重複書誌を作らない、不用意な修正・削除はしない（自館に不要なデータでも他館が必要であることがある。）等である。又、チェックリストによる入力後の点検は必ず行い、書誌情報の品質管理に努めている。なお、品質の管理に関しては、入力者個人のチェック、担当者間相互チェックに加えて、場合によっては、他大学から指摘を受けることもある。また、重複書誌を一つにまとめる処理などは、NCが、独自の調査結果と各接続大学からの

報告にもとづいて行う。この処理に伴う所蔵情報の修正については、NCから該当の接続館に依頼がある。

NCの仕様の改善・変更については、「オンライン・システム・ニュースレター」(隔月刊)により通知されるので、通覧する必要がある。

### 3. 書誌・所蔵データベース構築状況

オンライン目録作成により蓄積されたデータは、下記の通りである。近畿北部地区国立大学目録データベースは、本学のほか、近畿北部の五大学(京都工芸繊維大学、滋賀医科大学、滋賀大学、奈良教育大学、京都教育大学)を含む。

#### 近畿北部地区国立大学目録データベース

平成2年1月末現在

	書 誌			所 蔵		
	和 書*	洋 書	合 計	和 書*	洋 書	合 計
京 都 大 学	30,442	42,028	72,470	47,807	62,715	110,522
近畿北部6大学	58,075	53,146	111,221	106,613	80,686	187,299

\* 和書については、上記の外、閲覧業務用に入力されたデータがある。  
(6大学全体で、書誌約13万件、所蔵約18万件)

#### NACSIS-CAT システムデータベース (接続大学112大学)

平成2年1月25日現在

書 誌				所 蔵		
和 書	洋 書	洋書遡及	合 計	和 書	洋 書	合 計
329,395	374,499	293,617	997,511	1,313,487	1,166,051	2,479,538

### 4. オンライン目録検索

#### (1) 利用者用端末からの検索

附属図書館では利用者用端末を平成2年1月より6台に増設した。設置場所も、利用の便を考慮してメインカウンター前、インフォメーションカウンター横の2カ所とした。利用者は、この6台の端末を使って近畿北部地区目録データベースを検索できる。検索方法については端末備え付けのマニュアルを参照されたい。

#### (2) 研究室等の端末からの検索

近畿北部地区目録データベースを各研究室から検索するには、京都大学統合情報通信システム(KUINS)<sup>\*3</sup>を経由することになるが、現在、一部プログラムを修正中であり、近く公開へ向けて準備を進めている。

学術情報センター情報検索サービス(NACSIS-IR)<sup>\*4</sup>は、研究者の学術研究、図書館にお

ける参考調査活動の支援を目的としているが、提供されているデータベースの一つに「目録所在情報データベース」(図書・雑誌)がある。データの内容は、NACSIS-CATとほぼ同じである。このデータベースは利用者の申請により有料で利用できる。(1セッション30円)詳細は、「静脩」Vol. 24, No. 1~3(1987. 10, 1988. 1)「情報検索サービスの手引」(学術情報センター、昭和62年4月)を参照されたい。

#### (3) 目録用端末からの検索(各図書館・室に配置)

目録用端末からは、近畿北部地区目録データベース、NACSIS-CATの検索が可能である。附属図書館では、参考調査、相互利用等のための検索にも利用している。

おわりに

附属図書館が入力を開始した当初は、NCのシ

システムも流動的であり、また、附属図書館の目録システムのトラブルもなにかと多く、さらに、機械に対するある種の恐怖心もあり、まごつくことが多かった。しかし、最近はNCのシステムも安定し、マニュアルも整備され掛員の慣れともあいまって、入力は大滑りに行われている。

さて、京都大学全部局の目録の電算化にむけて図書館主催の講習会が2月中旬から順次開催されている。これは、先行館である附属図書館が、部局の目録の電算化がスムーズにすすめられるようサポートする目的で開くものである。新たに入力を始める職員の方々は、不安も大きいだろう。しかし、「習うより慣れろ」という言葉があり、これは、入力についてもあてはまる。この講習会で概略をつかんだら、マニュアルを手にもまず端末の前に座ることをおすすめしたい。附属図書館の目録担当者も、実際に入力しながらマニュアルを再読し、目録規則を確認する等を繰り返す中で、しだいに入力に慣れていった。

今後、カード目録がオンライン目録に順次移行し、加えて、本学創立以来蓄積されてきたカード目録のデータベース化が実施されれば、データベースは確実に充実していく。一方、本学のオンライン目録検索のレスポンスタイムの向上にむけて、

DBMS<sup>\*5</sup>の改善の計画もすすめられているので、データ内容、検索システムともに向上が期待される。この様な状況の中で、全国大学図書館目録電算化システムが利用者にとってさらに有用なものになるよう、我々図書館員は努力したいものである。

最後に、人づてではあるが、ある大学の小さな図書室の職員の声を紹介して本稿を終わる。「一人でカード目録を作っていた時は、常に、これでいいのか、間違っていないかと不安にかられることが多かった。でもNCのシステムで目録を作成するようになってからは、全国の仲間と共同で作っているということが支えになり、不安はなくなった。」

- \* 1 NAtional Center for Science Information System—CATaloging service
- \* 2 「目録システム利用マニュアル データベース編」(学術情報センター、昭和62年12月)
- \* 3 Kyoto University Integrated information Network System
- \* 4 NAtional Ceter for Science Information System—Information Retrieval service
- \* 5 Date Base Management System

---

## 図書館業務電子計算機の更新について(概報)

昭和59年度(昭和60年1月)附属図書館に、汎用の中型コンピュータ導入の経費が予算化されて5年が経過しましたが、この年末年始にかけてこのコンピュータの機器更新が行われました。

附属図書館に最初に導入されたコンピュータは、昭和59年4月の新館開館とともに稼働し始めた、図書の貸出返却業務を処理するシステムで、いわゆるオフィスコンピュータといわれるものです。その後、中型コンピュータが導入されたわけですが、これによって、その他の受入業務や目録業務

などのシステム化が実現されました。現在では、利用者は直接目録データベースを検索(オンライン目録検索)することも可能となり、図書館におけるコンピュータの利用はすっかり定着しました。

とくに目録システムは、全国の大学図書館が共同して、目録データを学術情報センターのデータベースに登録し利用するシステムが完成していき、急速に進展してきました。今では、100を越える大学の400万件以上の目録データが図書館端末で検索出来るようになっています。